子どもと保護者と教職員とともに考える！

人権フォーラム新聞

令和５年 10 月 30 日発行第８号

１年生では、９月２０日（水）に福祉の専門学校の方による高齢者疑似介護体験と認知症サポート講座が、また、９月２７日（水）には１・２年生が参加して、つるぎ町社会福祉協議会の方と手話サークルつるぎの方による手話講話と手話体験が行われました。

高齢者疑似介護体験では、８５歳になって洗濯物を干してたたむ、新聞を読む、お箸をつかって小さなものを移動する、買い物をするという体験をしました。手足におもりを巻き、視界が黄色くなる視界ゴーグルと外からの音を遮断するヘッドホンをつけ、背曲げ用ゴムで背中を曲げた状態にして行いました。生徒たちからは、「腰が痛い」「小銭が見えない」「足が重い」など、素直に大変だという発言がたくさん聞こえてきました。それと同時に、自分たちは３０分の体験だったけれど、高齢者の方は毎日それをしていると知って、高齢者の方の気持ちに気づく事ができた貴重な疑似体験となりました。これからは高齢者の方に寄り添い、協力する必要性や関わり方を知ることが大切だと感想に書いてくれた子もいました。

認知症サポート講座では、認知症は誰もがかかる可能性のある病気であり、年齢が高くなるほどかかる可能性が高いという事を教えていただき、認知症について正しく理解し、地域で支えることの大切さを考える貴重な時間となりました。「一人ひとりが正しい知識をもつことでお手伝いできるサポーターになれる。そして、それが尊厳ある暮らしをみんなで守ることに繋がるんだ。」とお話の中で熱く語ってくださいました。現在、徳島県には 108,460 人もの認知症サポーターがいるそうです。この講座を受けて、貞光中学生も認知症サポーターとして寄り添い、助け合っていけるようになってほしいと思います。

手話サークル人権講話では、1・2 年生に聾学校（現在は聴覚支援学校）時代のお話や中学校を出てからのお話を手話を用いて話していただきました。その当時の聾学校では、手話が禁止されていて口話が中心でコミュニケーションをとるのが大変だったそうで、中学校を出てからも手話ができる方が少なく、会話は口話が多かったと教えてくださいました。人権講話のあとの【質問タイム】では、たくさんの質問に答えていただいたので、いくつか紹介します。

生徒：「レストランで注文するとき、どうしていましたか？」
手話サークルの方：「紙に書いて伝えていました。」
生徒：「就職のときに面接はありましたか。」
手話サークルの方：「はい。ありました。筆談で面接をしました。」
生徒：「口話で困ることはありましたか。」

手話サークルの方：「“たまご・たばこ・なまこ”などの口の動きが似ている単語は間違えやすくて困りますね。」

先生：「新しい言葉がどんどん出てくる中で、手話も増えていっていますか？例えばインスタグラムとかタピオカとかありますが、このような新しい言葉はどうやって手話になっていますか。」

手話サークルの方：「全国日本通訳研究所で聾者が集まって少しずつ新しい言葉を作っています。」

【質問タイム】を通して、手話サークルの方とたくさんの会話をすることができました。生徒の中には手話を使って質問する子もいました。休憩時間の時には、生徒同士で手話をする様子も見られました。

保護者の皆さまの感想より

★先日擬似介護体験をさせてもらい、自らが体験することにより、自分は今後どうするべきなのか考える貴重なきっかけをいただくことができました。
「３人に１人が高齢者」である事を知り、つるぎ町は介護の必要性や、地域のコミュニティ作りの必要性を感じたようです。今後、学校生活をはじめ、ボランティアを通じて自発的に地域との絆作りに積極的に参加できると社会人の入り口に立てると思いました。車椅子体験をして、自分が思っている以上に動かすのが大変だと気づく事ができたので、助けが必要な時は手助けできるようになってほしいです。また、高齢者と話す時は大きな声で話すのが大変だったみたいですが、常に大きな声でゆっくり話す事を心がけてくれるといいと思いました。

★高齢者体験をする事で、身体を動かすのが大変だっだと感じたようで、高齢者の気持ちが少しでも理解できたのではないかと思います。また、手話で会話ができるようになりたいと話していたので、役に立てる用に頑張ってほしいです。

★家庭では学ぶ事できないので貴重な体験になったかと思います。これから子供自身が学んだ事を活かしていってもらえたら良いと思います。

ご家庭で人権問題について話をしていただけることが、お子様にとっても、学校から家庭へと学びをさらに深めていく大事な機会になると思います。ありがとうございました。

SDGs目標 3「すべての人に健康と福祉を」

SDGs目標 10「人や国の不平等をなくそう」